法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

日本語の歴史と日本語方言学

上村，幸雄

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
260
(終了ページ / End Page)
302
(発行年 / Year)
1979-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013097

日本語の歴史と日本語方言学

上村幸雄

じつは、沖縄にきて、もう二年半になるんですけれども、さっぱりまだ本格的に方言の研究にとりくめずにおります。したがって、きょうは、何もあたらしいことをもうしあげることができません。で、仕方がありませんので、これからやろうとしていること、そしてそれをやろうとするためには一体どういうことをかんがえなければならないかというようなことのお話になってしまうんですが、そういうことに、つまり服部先生をはじめ、あるいは伊波普猷以来のおおくの先輩のこれまでのいろいろな仕事を土台にしながら、これから僕たちは何をどういうふうに研究したらいいんだろうかというふうな話にさせていただきたいのです。

まず、日本語の歴史——これは当然琉球方言の歴史もふくんでなんですが——について、これまで

にいろいろなことがわかっているわけですけれども、まだまだわからない部分の方がおおきいということがあります。第一に、先日の服部先生のお話にもありましたように、日本語の系統がわかっていません。それから、日本語というものがいつ日本列島の中でつかわれはじめるようになったのか、というのは、今日のいろいろな方言、あるいは中央的な言語の直接の祖先にあたる言語がいつから日本列島でつかわれだしたかということもわからないし、それから、東北から与那国にいたるまで多様なひろがりをしめしている日本語の方言というものが、いったいいつの時代にどういうわけでわかれて今日の姿をとるにいたったのかということも、まだほとんどわかっていないといった方がいいわけなんです。方言研究のための資料がいろんな方面からかなりたくさんでて、研究もたくさんあるんですけれども、そういうことはまだわかっていません。

たとえば、琉球方言がいつ本土の方言からわかれたかということも、先日服部先生がお話になりましたように、大体の、ごくおおまかな推測がいえるにすぎない。たとえば、本土の奈良や京都の中央的な言語との関係からいえば、それが今から千年まえよりはあたらしくはないということはこれは言語学的な証拠によってはっきりいえるわけです。あるいは今から一万年まえほどのふるいできごとでもないともいえるでしょう。これははっきりした証拠というよりも、言語学的直感なのですが、そんなにふるく、旧石器時代と新石器時代のわかれ目ぐらいの時にわかれたような言語がこんなによくにているはずはない。そこでこれは大体やっぱり、弥生式の文化が本土にはいってからのことであろう

というわけです。そうして服部先生のお話の中で先生が非常に厳密な方法でほぼ確実に証明されましたように、八世紀の奈良の言語が存在した奈良時代よりはもっと前であってあとではない、これもはっきりいっていいことなのですね。しかし、琉球方言というものが一体いつごろどの島に定着して今日のようにひろがっていったのかとか、あるいは琉球列島にひろがるまえには九州にあってそれから沖縄にひろがったのだろうかとか、そういうことはまだいっさいわからなくて、これから研究しなければならない。

あるいは琉球方言をふくめ、日本のいろいろな方言が日本列島にもとおこなわれていたかもしれないいろいろな言語からどういう具体的な影響をうけたかということもわからないわけで、たとえば大体東北地方以北にアイヌ語がつかわれていたということは、金田一京助そのほかの方々の地名の研究やなんかでほぼ確実にいえるんですけれども、それ以外のことはほとんど何もわかっていないといった方がいいとおもいます。

そこで、こういったことをあきらかにするためにいろいろな言語学的な手つづきがあるわけですが、その手つづきについては、先日服部先生が非常にこまかくおはなしになりました。そこで、私はここでは、人間がつくっている社会組織の発展というものと言語の発展というものは一体どうかかわっているのかということ、つまり、社会組織がだんだん発展していくと、それにつれて言語もはじめは非常にちいさな言語であったものが、非常に巨大な、いま日本語は一億一千万人がはなしていることば

であるわけですけども、そういう言語に発展していくというのは一般に社会組織の発展とどういうふうに関係しあっているだろうかというようなことからかんがえていって、それならば日本列島ではどういうことをかんがえなければならないか、というふうに話をすすめていってみたいとおもいます。

日本のような単一の、ほぼ単一といえる言語をもっていて、そうして民族的にもかなり等質なところでそういう言語の発展の形態と社会組織の発展の形態との関係を研究するということは、ある意味では非常に不利なことであって、たとえばソビエトのように非常にたくさんの言語が存在していて、その言語の相互の交流、影響があると、言語学者もそういうことの観察の機会にめぐまれますし、あるいはアメリカ大陸でもそうなんですが、そういうところの言語学者の方がそういう研究はできるはずで、私もよその国のことはよくわからないんですが、しかし、やっぱりそういうことをちょっとかんがえてみる必要があるような気がしましたので、いろんなほかの学問にまなびながら一応いろんなことをかんがえてみたわけです。

そこで、社会組織の発展の形態というものをおおきくわけてみますと、たとえば旧石器時代の社会組織がありますね。そして、その次には新石器時代のものがきますし、ついで金属器時代の社会組織がくる。金属器時代になってくると、国家といわれるようなものが発生して、それがしまいには今日のような非常におおきな近代的な資本主義国家、あるいは社会主義国家というようなものに発展していくわけですね。そのばあいに、それに相応しながら言語というものがやっぱり一定の特徴をもちな

がら、これは内的な特徴というよりは、外的な特徴なんですが、特徴をもちながら発展していく。

そういう発展の法則の一般性というものがやっぱりありはしないかと、そういうことをかんがえてみるんですが、そうしますと、まずたとえば旧石器時代というものをどういうふうにかんがえたらいいか。旧石器時代というものはもう今日はのこっていないわけで、旧石器時代の社会組織および言語というものを直接、観察することはできないわけです。今日ほとんど狩猟だけをしているような、たとえば、アフリカの南の、西南アフリカの砂漠にすんでいる人びと、そういう人びとは、採取狩猟をおもにしておりますけれども、そこの社会組織は発展の形態ではなくて、むしろ衰退の形態とみるべきで、ほかのいろんな種族に圧迫されて一番不利な場所においやられて、もとはもっとおおきな社会組織ともっとたかい文化をもっていたんではないかというふうに推測される。そういうものがおおいわけですね。また、オーストラリアの原住民、これはヨーロッパ人がそこに到達するまでは大体三十万人ぐらいいたんではないかというふうに本にかかれています。そこでは採取狩猟経済がおこなわれていて、そこの言語は非常にたくさんの方言にわかれているということがしられております。オーストラリアの社会組織というものは、その当時の植民者や、それにつれだっていった人びとのいろんな報告から、ヨーロッパの学者がだいぶ以前にいろいろ研究して、たとえば、フランスの有名な社会学者デュルケムが『宗教生活の原初形態』という大変な、宗教の発展に関する名著をかいておりますけれども、それもオーストラリアの土着民を対象にしておるんですが、そこではもう採取狩猟経済とい

ってもおそらく、その採取狩猟経済というのは、人類の歴史は五十万年とか百万年とかあるいは二百万年とか、あるいはもっとのばせばもっとながい歴史がある、そのかなりおわりの方の段階ではないかと、つまりかなり立派な社会組織をもっておりますし、たとえば結婚するばあいにどういう制約があるかとかですね、それからはっきりとした、トーテミズムではありますけれども、宗教の体系をもっています。言語についてみても、そんなめちゃめちゃな、人間と動物の中間のような言語をはなしているなんていう事実はまったくなくて、非常に複雑な、きちんとしたシステムをもった言語をもっているということも確認されているんです。

そういったことがらからおおまかに推測して、旧石器時代の社会組織というものは小集団のものであること、非常に社会組織の規模がちいさいということがひとつの特徴といえますね。それは数十人からせいぜい数百人どまりの、そういう小数の集団が、ひとつの経済的なむすびつきをつくっていて、そうしてそういう集団相互のあいだで、たがいにこまかくわかれた方言が存在している、そしてそういう方言は非常にながい時間がたつと非常にちがった言語になってしまうんでしょうけれども、そういう状態というものを想像してみなければならないとおもいます。そして、そういう時代は地球上、人口が非常に稀薄で、人間は生活のできるところをもとめてながい間には非常にとおいところにいってしまって、そしてある集団はその生活ができなくなるとほかの集団の中に吸収されたり、集団の人間がふえると生活ができなくなりますからまたその集団がわかれていって、そういうふうにして地球

上の言語は非常にたくさんの言語と方言に、そういう時代に分岐していったんではないかというふうにかんがえていいんじゃないかとおもうのです。

それで話をいそぎます関係で、新石器時代にうつりますが、この時代は大体農業、それと牧畜というものがはじまる時代というふうに、かんがえますと、日本の縄文時代はその点でいろいろ問題があるわけですけれども、そういうふうにかんがえて、一応世界史の上での新石器時代というものをかんがえることにしますと、農業がはじまり牧畜がはじまることによって集団はもっとおおきくなることができる。したがってひとつの言語、あるいは方言をはなす集団もおおきくなるということがいえます。それでも、旧石器時代にくらべればおおきくなるわけですけれども、規模というものもそんなに、ひとつの言語、あるいは方言をつかう集団が何十万人というようなふうにはなかなかならないんじゃないかとおもいます。そして政治経済的な単位というものも、ひとつの部族、あるいはいくつかの部族の連合といったものが単位でありますから、やっぱりひろい地域に非常にことなった、ながい時間がたてば言語は変化していきますから、非常にことなった言語が存在しているという状態が実現するだろうとおもわれます。

そういう状態というのは南北アメリカ大陸のアメリカインディアンの言語の状態をみてみると、よくわかります。その中にはインカ帝国をきづいたような、国家を形成しえたような、かなりおおきく発展した民族の言語もありますけども、そうでない言語がたくさんあって、新石器時代についてはた

とえばそういう状態をかんがえてみるべきだろうとおもうわけです。

そこで、世界の言語というものはそういうふうにして、ながい旧石器時代、そしてそれにくらべればずっとみじかいけれども一万年ちかい新石器時代を経過したとするならば、これはたがいに非常にことなってしまう、中にはほろびてしまったものもあるし、いろんなことがおきているでしょうが、ことなってしまうのが当然であって、したがって世界の言語をひとつの言語の系統にまとめてしまうというような研究は、非常に困難だということになるとおもいます。

その次に、金属器時代になるというと、かなりおおきくようすがかわってまいりますね。ひとつの集団の規模というものはずっとおおきくなってくる。そうして非常にたくさんの農民を支配し管理するような支配階級のようなものがうまれて、そしてついには国家の形成にいたる。国家の形成にいたるまえには、部族国家というような妙な中間的なことばがありますけれども、あるいは集落国家ともいえるかもしれませんが、そういうような中間の段階が存在するんでしょうが、その時には、言語というものはおおきな集団のものになる。ひとつの言語あるいはひとつの方言がおおきな集団をもつという、可能性がでてくる。そして集団がついに今度は国家を形成するにいたると、一般にどういうことがおこるか。それは国家というものが、古代国家というものがどういう形態をとっているか、どういう形で人びとを支配階級が支配しているかという、その支配の形によっていろいろにちがってくるはずですけれども、たとえばローマ帝国のようなばあいですと、ラテン語という、ローマではなされ

ていた言語の爆発的な拡大がおこりますね。つまり、イタリア半島のごく小部分ではなされていたローマ人のラテン語というものが、ローマ帝国の拡大とともに、いまのスペイン、ポルトガル、それからフランス、それからスイスの一部、それからずっととんでルーマニアの方まで非常にひろい範囲にひろがっていく。おそらくこれはローマ人の征服と支配、政治経済的な各都市や村落のくみたてかた、そういうところにそういう急速な言語の普及というものをひきおこすひとつの原因があるとおもうわけですが、それとにたようなことはいろんな所で世界中で多分おこっているのでしょう。南米のインカ帝国のケチュア語もそうかもしれませんし、かつて殷からだんだんひろがっていく中国のいろんな帝国がだんだんおおきくなって、そうして中国語というものが中国の非常にひろい地域にひろがっていくという過程がおこるとか、そういうことがおこりますね。おそらく奴隷制社会を特徴とするような社会でもっとも爆発的な言語の拡大というものがおこるんじゃないかとおもいます。間接に異民族を支配してみつぎ物だけをとりあげているというような、そういう支配の形式のばあいは、まだそういう言語の爆発的な膨張というものはおきないもんだとおもいます。

今度は、先に話をいそぎまして封建制時代みたいな時にはどうなるのであろうかとかんがえてみますと、その前に古代国家があって、そうして非常にひろいところにひとつの言語がひろがると、その言語というものは、またその地域ごとの方言に分化していくというような傾向がおこりますけれども、封建制時代になると、領主圏ごとに方言がとりまとめられていくというような傾向がおこるのではな

いかとおもいます。もちろん封建制時代にはもう都市もありますし、かなり活発な商業もいとなまれますから、都市を中心とした商業などによって、おおきな都市の言語がまわりにひろがって領主圏ごとに成立した方言圏というものをまた一方では統一化するといったような力もはたらくとおもいますが、すくなくともそういう封建制の、地方への権力の分散を特徴とするような政治経済圏が農業社会を基礎にして形成されたばあいにそういうふうになっていくとおもいますが、日本、まあドイツもそうなんだろうとおもうんですが、そのほかにもいろんな形態の封建制度、あるいは古代国家以後の社会組織の発展の様式があるんじゃないかともおもわれますので、その時代の言語の発展について一般論を提出することは、ここではやめておきます。

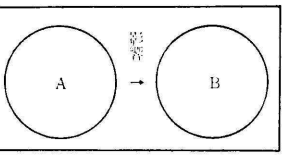
そしてそのあとには資本主義制がおこってくる。そのばあいには、都市というものの機能が非常におおきくなってくるということがおきますね。

その前にちょっと話をとばしすぎてかきことばの話をちょっとわすれていましたけれども、文字というものを、そうしてかきことばをもつということ、こういうことが世界の社会組織の発展の中でおこるのは、大体国家が発生する段階だというふうにかんがえていいですね。それ以前には、かりにちかくにほかの民族が発明した文字というものがあってもその当の民族にとっては不用ですから、そういう文字はただの模様にすぎないかもしれない。文字以前には部族では大事な記憶というのは、特別の才能をもったような人に記憶されて、うたわれて民族的な叙事詩を形成したりですね、いのりの文

句が宗教的な役わりをもった人にずうっと記憶されるといったようなことがおこるわけですが、国家というものが形成されると、非常におおくの人びとを支配し管理するためにどうしても文字というものが必要になるし、権力の確立のために文字というものは役だてられますね。

文字というものはつぎの封建制の時代には、たとえばヨーロッパにおいてラテン語というものがかきことば共通語として機能していたり、あるいは日本では漢文というものが、あるいは候文というものが、支配層の間の公用語としても、あるいは科学の用語としても、藩とは関係なくですね、ずっと共通のかきことばとして日本中に通用するといったようなことがおこるわけですが、そのかきことばを所有しているのは、もちろん古代国家のばあいには非常に少数の人たち、中世の封建制のばあいにもすくない。

資本主義国家になってくると文字の所有者がずっとふえてくる。そうして同時に都市、パリとかモスクワとか東京とか、そういう都市を中心としたはなしことばというものがかなりひろがって、それを基礎にして今度は、民族の統一的な文字言語というものが発生してくる。こういう過程がおこりますね。そしてその過程ではなしことばとかきことばの距離が非常にちぢまってくるというようなことがおきてきます。これは、たとえばフランスをみても、イギリスをみても、ドイツをみても、ロシアをみても、そしてまた日本をみても、そういうことはたしかにおこりました。で、そうして今度はその中で、農民、地方ごとにわかれていた農民の、その共同体を基礎に成立していたたくさんの方言と



いうものが崩壊していくということが同時におこってくるんです。

まあおおまかにひとつの言語の発展過程というものをえがいてみるとざっとこんなことがいえるんじゃないか、これはもうピュアーケースとしての話で、発展段階の途中をとばしたりとか、いろんな特殊事情によっていろんなケースがうまれますけれども、おおまかにはこういうことがいえるんじゃないかというわけです。

そうするとはじめはちいさい言語であったものが最後には文字言語をもつ、そして方言をもつとか、いろんな多機能的な存在形式のことなるものをもった、そして非常におおきな言語に発展していくというケースがみられるわけですが、ところがその一方では、ひとつの言語がおおきくひろがっていく間に、たくさんの言語がほろびていくということが同時におこっているわけですね。

一般にある民族がほかの民族から文化的な影響をうけると、あるいは政治的経済的な支配をうけると、そういうことによってその民族の言語は、ほかの言語からさまざまな影響をうけるわけですが、その影響のうけ方というのがまた、いろんな程度があるし、いろんなタイプがあるはずなんですね。それをひとつ、典型的な場合を図示してみますと、ここにひとつのAという集団があって、Aという言語をはなしている。そっちにBという集団があってBという言語をはなしているとしますと、Aの文化がBにつたわったとき、Bの言語にちょっとした変化がおきるといった、そういう非常にかるい

程度の影響もあります。

このばあいはAの言語が直接Bにはいってこなくてもよろしいんで、文化だけがつたわればよろしい。AとBとの距離はちかくてもとおくてもよろしいんで、たとえば新大陸にですね、じゃがいもとかとうもろこしとかピーナッツとかそういうものがあって、それがずっとつたわってはるばる日本にはいってくる。日本にはいってくるとそこで今度はジャガイモとかトーモロコシとか、そういういろんなことばが日本語の中でつくられる。もとあった日本語を基礎にしてつくられる。こういうのは文化の間接的な影響があって、Aの言語の影響はBの言語に直接にはおよばない。そういうケースもある。あるいは、中米あたりからたばこなんていうものが、タバコということばはもともとたばこの植物の名前なんですが、たばこが日本につたわって、このタバコということばもいろんなほかの言語を媒介にしながらついに日本語にまでとどく。こういうふたつのケースは非常に影響があさいようなケースなんですね。

ところで今度はもっとも影響のこいケースはこういうケースです。つまり、Aの言語が全部Bの言語といれかわってしまう、Aの言語の圧倒的な勢力のまえにBの言語はほろびてしまう。そういうのが今度はもっとも極端なケースです。そしてその中間のいろいろなケースがある。その中間のいろいろなケースがどういうばあいにどういうふうにしておこるかということを、いろんな言語の歴史の事例の中からみていかなければならないわけです。

一般的にひとつの言語というものが他の言語をほろぼしてしまってこれを中にとりこんでしまうというばあいには大体もとの、Bの言語をはなしていたいろんなちいさな共同体がひとつ、あるいはたくさんあると、そういうものが政治的に経済的に支配されて、この共同体が破壊されなければならない。そういう条件がおこったときにはこの言語はほろびるんだといえるでしょう。

ところがそこまでいかないばあいには、その中間のいろんなことがおこるわけですね。Aの言語のたくさんの単語がBの言語の中に流入するとかですね、それからBの言語の音韻体系や文法体系までがAの言語の影響をうける、しかし、Bの言語がついにほろびるまでにはいたらずに、もとの音韻体系、文法体系をなんとかもちつづける、そういうばあいがある。それからそれほどではなくて、単語だけが、たとえば百なら百ぐらいAからBへとりいれられたというような段階にとどまるばあいもあります。琉球王国が成立してからあと、首里の方言におよんだ中国語からの影響というものはそういう段階のものだといえましょう。そういう、いろんなことが世界史の中でおこります。

そして一般にAの言語がBという言語をすっかり吸収してしまって、このAの言語がBの集団にひろがってですね、Bの言語がAの言語に圧倒されてしまったばあいにも、このA、Bの言語というものが非常にちがう言語であるばあいには、なんらかの痕跡がこのA言語の中に発見されるものなんですね。なんらかの痕跡といっても、まあ一番のこりうる痕跡というのは、たとえば地名でしょう。たとえばそのことは東北地方でおこりました。北海道でもおこっています。あるいは音韻体系、あるい

はある音韻を発音するときの調音的な特徴、呼気のつかいかたとか喉頭のつかいかたとか、そういったような特徴がのこったりします。そういうばあいにはどういうものがそういう痕跡でありうるかということをさがしださなければならないということになるわけなんですね。

そこで、じゃあ日本列島においては一体どういうことがおこりうるのか、実際におこったんじゃなくて、おこりえたのかというようなことをかんがえてみることにします。そうすると、日本でも旧石器時代があったということは最近ではもうまったく考古学の常識になりましたけれども、そういう時代というのはやっぱり非常にことなる方言ないし言語、複数の言語がパランパランとあって、それが攻防をつづけ、そしてある言語がある言語に吸収されるとか、そういったことがたくさんおこったかもしれない。しかしそういうことがどういうふうにおこったのかというのは具体的には何もわからないといった方がいいとおもいますね。おそらく、現代のわたしたちの知識ではちょっとしりようもないでしょう。

では縄文時代という時代はどうかといえば、その縄文時代は、これが採取狩猟の時代であるかどうか考古学的にもいろいろと問題になっておりますね。そして確実なこととしてもう縄文末期には九州、北九州では弥生式の土器をもつ前に、稲がつくられていたというようなことも最近ではわかってきております。それから縄文文化というものに関して、たとえば東北の青森県の亀ヶ丘の土器なんかをみ

てみても大変りっぱな土器でして、そうして住居にもかなり定住性がでてきているとか、いろんなことで、まあ中期ごろからもう農耕がはじまっていたんではないかなんていう論争がおきてたりしています。ありうるともっとも想像されるのは、いもの栽培ですね。しかしそのいもというものは焼畑なんかで木の棒のような簡単な道具でつくられるし、それからいもはくさってしまうから考古学的な証拠がのこりにくい。で、なかなか証拠はでてこないようでありますけれども、そういうものがおこなわれた可能性はかなりあるとおもうんですね。そうしてすくなくとも末期になってくると社会組織はかなりな発展の段階をしめしていて、たとえば福岡の板付の遺跡で弥生式のすぐ下にでてくる遺跡は、弥生式文化のはじめの村落の構造とそんなにかわりがない構造をもっていたんではないかと想像させるふしがあります。しかし、末期にこういう状態があるにしても、この縄文時代というものが八千年くらいもつづいたということをかんがえても、またいろんな土器や出土品がさまざまな時期的なあるいは地方的な分布をしめすことからかんがえても、このながい期間、言語も、やっぱり相当多様であって、複数の言語がそこでおこなわれていてもいっこう不思議はない状況をそこに想像してもいいんじゃないかと、そんなふうにかんがえます。

で、今度はいよいよ弥生式時代にはいってくるんですが、これはもう最初から金属器を、朝鮮半島経由で金属器をもっているし、稲をもっている。そうして、まあちょっとあとになりますけれども、三世紀の『魏志倭人伝』あたりの記述をみていると、そこにははっきりとした階級的な対立があって、

下の者は上の人がとおるときにおがむようにしてこう地面にうずくまって頭をさげるなんていう記述がでてきたり、それから、たくさんかかげてある国の、戸数がかいてあったりします。その戸数というものはかならずしも信用がおけないのですけれども、千戸、三千戸というのから二万戸、五万戸、七万戸なんていうのがかいてあるわけですね。ヤマタイ国と俗にいわれている国の戸数は七万余戸とかかれている。そこで千人の奴婢をつかっていたというふうにかかれていて、まあ七万戸ならば数十万の人口があるということになります。この数字をうのみにすることはできませんけれども、まったくでたらめとみることもできません。で、遺跡の出土状況、その時の土木技術、そういうものからして、そういう国家の発生、いや国家といってはまだ具合がわるいですね、集落国家でしょうけども、国家以前のもの、そういうものが発生していることはまったくまちがいがないといえます。

そうしてそこに奴婢がいたり、階級の対立があったりしたということ、そして武器がでるということは、そういう、土地と人民をあらそう闘争があって、そうして前の社会組織が破壊されてひとつにまとめられるということがおこったわけで、そうだとすれば、そこではそういう小国家ごとの言語、あるいはそれが同一系統の言語であるならば、方言というものがそういうところを基礎にして成立していくという過程が進展するはずですね。そしてもしその縄文文化と弥生文化の差というものがそんなに絶大な幅をもつものでなくて、それに多少とも移行的な様相があるならば、縄文時代につかわれていたことばというものは弥生時代になってもなんらかの痕跡をのこすという可能性も、これもおお

いにかんがえてみていい。こういうようなことがいえやしないかとかんがえるわけです。そしてもっともありうる可能性としては、やはり北九州に渡来した人びとがはじめから日本語をもってきたのか、それともそこで日本語が成立したのか、これは別として、そういうところで日本語のもとが日本列島の中で最初につかわれだした、そういう可能性はひとつの可能性としてやっぱりかんがえてみる必要があります。

それが今度は古墳時代にいたる。大体五世紀、そしてついに古墳時代がおわって、七世紀、八世紀がくるころになると、完全な形での古代国家というものが出現しますね。律令制度をもった、沖縄の地割制度が問題になっていますけれども、ああいう地割制度みたいなものを基礎にした、そういうみごとな国家が実現してくる。そして都の奈良なんていうのは、『日本の歴史』の三巻をみていましたら、そこで人口二十万なんて推定してありました。それがただしいかどうかわかりませんけれども、そういうような都市というものがうまれ、そして職業の分化というようなものが進行しています。そういう支配と管理の体制が非常にゆきとどいた国家は、それ以前の、たとえば五世紀とか、たぶん四世紀とか三世紀とか、そういう時代の、なんていうか、みつぎ物をとりたててそしてそこの首長をその地方の長官としておくというような、そういう朝貢関係を基礎にするような、そういう国家とはずいぶんちがった言語のおおきな統一化の力として、そういうものがはたらくはずでありますね。

で、そうして今度はそういう、言語を統一する中心というものは、大和、つまり北九州ではなくて

大和にあって、そして大和からそれがずっとひろがっていくという過程がかんがえられるわけです。それ以前に、北九州から大和への、たとえばホメロスの詩にでてくる物語を基礎に、シュリーマンが古代の小アジアの大都市を発見したようなですね、そういうような発見が日本で神武東征伝説でできるかどうかはこれはわかりませんけれども、そういう武力にとんだ、しかもそんなに経済力や文化のたかさでは中央におよばなかった集団というものがあるいは中央の奈良盆地を征服したかもしれない。ヤマタイ国はどこにあるかなんていう話はまあ、ちょっと別にしても、そういうことというのは十分かんがえうることであって、かならずしも、たとえば近畿地方に非常にたくさん大規模な古墳があって、北九州のものは、いやヤマタイ国あたりが想定されているところのものはそれよりちいさいなんてことがそういうことを否定する根拠にはならないはずなんですね。つまりそういう征服というものは歴史上きわめてしばしば軍事力に、そして機動力にとんだ、より文化的にはひくい民族がひきおこしていますから。

で、そういうことをひきおこしたような証拠が方言学的に何かでてくるかどうか、これは問題で、いまのところそういうものはありませんけれども、ひとつだけ、たとえば安本美典という人が何ですか、『神武東征』という本をかいていまして、それともう一冊まえにかいていますが、その中で、奈良盆地のいろんな地名というものと、それから福岡県の中部、飯塚市の南のあたりを中心にした、あすこの山門郡のちかくですが、福岡の問題の山門郡にちかいところの地名とが、時計の針の順序にず

うっとならんでいる、というような指摘があります。地形がにていればおなじような名前がつくということもこれもかんがえられることですけれども、先住地の人たちが、征服した先で自分たちのふるさとの名前をつけるということもたくさんおきていることですから、そういうことが何かの証拠に将来役だてられる可能性はあるとおもいます。

そして古代国家が形成されるわけですが、そのばあい、今度は、その古代国家の支配というのは東北の大部分にはまだおよんでいなくて、そうしてたびたび戦争をおこして東北を征服していくという事実が平安時代にまでつづくわけですね。そうして一方でハヤト、鹿児島にいるハヤトは、たびたび反乱をおこすといったようなことがあって、ではハヤトの言語、そうしてエゾの言語というものはどういうものであったかということも、まだ確実なことはいえない。いくつかのいろんな可能性をかんがえてみなければならない。これは先住していた人間の、日本語とはことなる言語である、あるいは弥生式時代に弥生式文化の急速なひろがりとともにひろがってたいへんに方言化した、あるいは土着の言語の影響を非常にうけた日本語であって、もう通じないくらいちがっていたという可能性もありますし、いろんなことをやっぱり一応かんがえてみる必要があります。それからまだ平安時代にはいってさえも、おそらく日本に日本語だけがつかわれていたとみなせないこともありうる。つまり、文献には、たとえばクマソが、クマソはもっと前ですが、クマソがありますし、ハヤトがありますし、それから筑前には土グモなんていうのがいたとか、あるいは『常陸風土記』にはサエキという、その

何か妙な、何だかわけのわからないのがでてきたり、それからコシの国にいる人、それからケの国にいる人というのも、これはどういう言語をつかっていたのか、このあとのふたつのばあいはたぶん日本語をつかっていたんじゃないかなどというふうに、想像するだけなんですね。そして問題のエゾあるいはエミシ、それからミシハセといわれる、海をわたってミシハセをうったという記事がありますが、このミシハセとは何であるか、これはトウングースであるなんていう説がありますけれども、どういう根拠でそういう説がでているのかぼくにはわかりません。けれども、ちいさな集団になって残存した先住民族に属する人間が山の奥地にいたりしたということは、まだそういう時代でもあった可能性がありますね。

で、ここまでは、こういう社会組織の発展の歴史とかいろんな歴史上の記述などから言語にどういうことがおこるかという可能性をいろいろ想定してみただけの話なのですが、それなら琉球列島はそういう可能性からかんがえてみたらどういうことになるかというと、琉球列島に国家が発生するというのは、ずうっとのちのことになるわけですね。琉球列島の先史をみると、縄文時代から本土との交流があったということも事実ですし、それから最近は沖縄本島で弥生式の土器がでてくるという、非常におもしろい事実がでておりますし、それから、奈良時代のころに、何かおおきな変化があったんじゃないかというようなことも、考古学上かんがえられているようであります。

歴史の上でみてみれば、七世紀から八世紀くらいにかけて、いろんな、『日本書紀』やあるいは『続

日本紀』の記述がでてくる。南の島に国をもとめさせて、武器をもたせてやったとかいう記事とか、どういう人がみつぎ物をもってやってきたとか、そしてそこに徳之島に比定される島、あるいは久米島に比定される島、あるいは奄美に比定される島、石垣島に比定される島、そういう島の人たちがやってきたとあるんですが、こういったことはもちろん朝鮮半島との国際的な関係からおこっただろうとおもわれるわけで、つまり新羅との仲が決定的にわるくなって、遣唐使を派遣するためのあたらしい航路が確保されなければならなかった。そのばあいの一番南のコースが沖縄をとおるコースであったわけで、島じまにいったんくちた碑をふたたびたてさせたというような記事もありますが、そういう南島に関する記事の総量は大変すくない。それはおそらく、九州およびそれ以南の経営というものは直接は太宰府がおこなっていたんであって、中央政府がおこなっていたんじゃない——太宰府なんていうものが九州に存在すること自身が非常におもしろいことなんですが——というようなことにもよりましょう。そうしてつぎに、遣唐使が廃止されると同時に南島に関する中央権力の関心というものはなくなってしまいます。

しかし、この遣唐使の時代にあらわれるこうしたいくつかの記事というものをみますと、この時期に南島でおおきな、何というか政治的な変化がおこっても不思議はない。そこに何か琉球列島の歴史の一つの転機がおこる可能性というものはやっぱりかんがえてみなければならないでしょう。それからまた、遣唐使船というものが、もちろん中国語の通訳はつれていたんですが、奄美訳語という通訳

をつれていたということも事実であって、その通訳が一体何語を通訳していたのかわかりませんが、これはすくなくとも通じないくらいちがう言語が南島につかわれていたんではないかと推測する有力な証拠にもなるわけです。

そうして沖縄にはずうっとたってから国家が発生します。そして沖縄にかな文字がはいり、漢字がはいる。このことは、かなが先にはいってそのあとから漢字というものがはいったらしいということを服部先生の講演でおききして感激したんですが、やっぱりそれは沖縄における国家の形成というものとまったくむすびついておこるんだとみなければなりません。そして『おもろさうし』というものが編纂される過程というものは、国家権力を維持するための宗教の統一、宗教の最高の権威を国家が部落からとりあげるという形の宗教政策とむすびついておりますし、それから円覚寺をたてるとかそういう事がらは、王族の高貴性というものをしめす、ちょうど古代国家で伊勢神宮のようなものができあがるとか、そしてそれだけではそれは土俗宗教の発展の形態ですから、それだけではいろいろたりないので、仏教をもってきて国ぢゅうに国分寺をたてるとかいうこととにていますし、そして本土ではそのとき歴史があまれはじめて、風土記なんかもつくられるんですが、『琉球国由来記』がつくられるというのは風土記がつくられてからちょうど千年後になるわけですから、ちょうど千年後ぐらいに、そういう時代が沖縄にくるということになります。

ところで琉球列島に国家が形成される以前に琉球方言がひろがっていたのは確実で、それがどのぐ

らいの時期にひろがったかというのは、これはまだわかりませんけれども、三山対立時代のようなものがあって、その三山対立時代の北山と中山の国境というものと、いまの沖縄の北部方言と南部方言の境界というものがたぶん一致するんじゃないかということは以前から仲宗根政善先生などの関心事でありまして、これについて琉大の方言クラブがしらべたものがありますけれども、そういう国家統一以前の政治的支配圏というものは、なお今日の琉球方言のいろんな分布にあとをとどめているだろうとおもいます。そういうものもよく研究すればこれからわかってくるだろうと予想されます。

まあ、大体こんなことをかんがえてみたわけですが、以上のことは社会組織の発展というものと、言語の発展の相互関係を、言語の外的な側面からながめてみたんですが、今度は言語の内的な側面から、言語の中からみるとどうだろうかということについてちょっとかんがえてみたいとおもいます。

そしてその中でここであつかうのは語彙でありまして、文法というものと音韻というものは、これは社会組織の発展に呼応して発展するのかどうか、そういうことはまだ言語学はあきらかにしていないことだとおもわれますので、たしかに、音声組織というものも文法組織というものも、文化の発展とともに発展することがまったくないとは断言できないんですが、はっきりこういう発展をするんだということはいえませんから、ちょっと話の外におかせていただきたいわけです。そこで語彙というものについてのべたいとおもいます。

語彙というものはやっぱり社会組織の発展と密接に関係しながらそのゆたかさというものをましていくというふうにみていいんじゃないかとおもわれるんですが、それは、たとえば、現代の中学生や高校生のつかう国語辞典というものをみても、大体七万語とかそのぐらいの単語がのっていますけれども、たとえば、文字をもっていないひとつの方言から七万語の単語を採集するということはまず不可能だというようなことからもいえるでしょう。

総量という点からも語彙はゆたかになっていくわけですが、その語彙の中で最初に、基本語彙とか基礎語彙とかいわれている部分をかんがえてみたいとおもいます。

これは、前に、アメリカのスウォデッシュが考案した言語年代学というのがあって、それを服部先生が紹介なさると同時に、日本語およびその周辺のいろいろな言語について統計をおとりになったわけですが、そこで調査項目としてつかわれているような語彙というのには文化の形態にかかわりなくずうっと存続するであろうとおもわれるような単語がえらばれているわけですね。ですから言語年代学というものが、年代の測定にはどれほど有効であるか、スウォデッシュがかんがえたような言語の変化の一定の率というものは、おそらく社会組織の発展の段階やほかの民族との闘争の度あいといったものがちがってしまえばあてはまらないんじゃないかとおもいますけれども、もしその度あいが一定であればあてはまる可能性もあるんですが、しかしそこにあつまっているような単語というものは、語彙の構造をかんがえていくばあいにもじつに大切なものがおおいのでして、ですから一般に基礎語

彙の研究というものは非常に大切なものだとおもわなければなりません。

どういうのがそういう基礎語彙にはいるかといえば、たとえばそうですね、人の身体の部分のおもな名前ですね、目とか鼻とか口とか舌とか耳とか胸とか手とか足とか腹とか、そういう、どんな民族も共通にもち、しかも目はものをみる、手はなにかこう道具としてつかう、足は歩行につかうとか、そういうふうに機能もはっきりしている、そういうものをあらわす単語というものは、旧石器時代の人間もたぶんもっていただろうし、ずうっと人間の生活がつづく以上もちつづけなければならない単語であるともいえるでしょう。あるいは親とか子のようなですね、すくなくとも母親と子どもの関係、父親と子どもの関係はしばしば認識されないことがありますから、父親の役わりというのはわからないというばあいがありえますから、母親と子をあらわすような単語ですとか、あるいはいろいろな自然、星とか月とか太陽とか水とか石とか土とか草とか木とか、氷とか雨とか、ところによっては海がなくて砂漠ばかりということで、環境によって自然もちがうところがありますけれども、そういうものですね。それからたとえば、人間というものはかならずうまれて、おおきくなって、おいて、しぬわけですから、ウマレルとかソダツとかオイルとかシヌとか、そういうような単語とか、人間はかならず朝、まあかならずといっていいかどうか、朝おきるし、夜ねるし、あるくし、たつし、すわるし、そういう動作をあらわす単語ですね、そういう単語というものはずうっと人間がどのような社会でももちつづけなければならないことばでしょう。あるいは自然に対していろいろなはたらきかけをあら

わす単語、もしこういうものがあれば、こういう動作をすればこれはオスであるし、こうすればヒッパルであるし、こうやればオッコトスであるし、こうやればナゲルである。そういったようなことは、どんな人間もやっていることですね。そうして人間は社会的な動物でありますから、男性と女性が交接したり、結婚のような、長期的な性的な関係をむすんだり、それから、ことばではなしたり、ものをあげたりもらったり、どんな社会でもやっぱりそういうことはおこるでしょう。そういう行為をあらわす単語ですね。あるいはイタイとかカユイとかウレシイ、そういう感覚、あるいは感情をあらわすことばとか、あるいはぼくとか君とかそういうはなし手、きき手をあらわすことば、あるいはナガイとかミジカイとかオモイとかカルイとか、ヤワラカイとかカタイとかいうことば、それから夜になればくらくなるし昼間はあかるい、血の色はあかい、雲はしろい、そういうあらゆる社会に共通した現象をあらわすことばというものがある。そういうことばというものはかならず、人間がいればその祖先ももっていたし、人間がどこかにうつっていったばあいにそのうつっていった人間ももっていなければならない単語でしょうから、そういう単語をしらべるということはやっぱり非常に大切ですね。

そしてそういう単語がもしほかの言語の単語といれかわるというようなことがおきたとすれば、やっぱりそれは言語にとって大事件であると、こうかんがえなければいけない。そこで、琉球方言でたとえば、空を天、ティンというとすれば、ティンは中国語ですから、なぜ中国語というものがはいっているのか、それはいつはいったのかと、そういうことを真剣にかんがえてみる必要がある。太陽を

あらわすティーダというのはいろいろ説がありますけれども、私はそれはテンドウあるいはテントウ、天の道ですね、天道である可能性が非常にたかいとおもいますが、そうするとそれも中国語である。なぜ太陽をあらわすような、天をあらわすような単語がいれかわっているのかというようなことも大切なことで、そういうものがいれかわればやはり大事件ですから、やっぱりそういう基本的な単語というものがどれだけ語彙全体の中にあるのかということや、ひとつの言語のなかでそれがどのくらいよその言語の単語といれかわってしまっているかというようなことについてわれわれはよくしらなきゃならないし、それからそういうことは方言研究をするばあいにのがすことができない大切なことでしょう。

それから次に、ある特定の地域に特有なものというものがありますね。特有でなくてもそこで人間が生活していておそらく非常にながくかかわったであろうもの、たとえば縄文時代の人間はおそらくその、東日本の大部分では、大体天竜川からずっとむこうではサケをとっていたにちがいないとかですね、それから風土記にあゆについての記事が、この川には「鮎、沢にあり」なんてかいてある。そういう日本人にとって大切だっただろう魚、サケとかアユとかイワシとかサバとかクジラとか、あるいはカツオとかですね、そういったようなものとか、それからいろんな、ながい期間食料にしたであろう植物、そういうものをあらわす単語は非常に大切だし、それからまた、地名というものも非常に大切ですね。日本語の単語の、字びきでいえば六十%以上が漢語であるんですけれども、つまり中国

からはいった単語なんですけども、たとえば日本中の県庁の所在地の名前はほとんど全部和語なんですね。なぜそういうことがおこるのか、中国文化がはいってもそういう地名というものはのこる。こうして和語がのこっている以上、その和語というものもその中にどういう由来のものがあるのかわからないんですが、地名というものは土地にくっついていてその土地の名前になってしまっていますが、最初は普通名詞であったものが、普通名詞の意味がなくなったまま、その土地の名前としてのこるわけですから、そういうものも大変大切だといわなければなりません。

そうしてつぎには文化の発展、社会の発展と同時にそれと呼応してうまれるだろうところのいろいろな単語というものがあります。そういうものもかんがえてみなければいけないとおもいますね。たとえば金属器時代にはいったら、金属の名前というものが必要になるはずですし、それ以前には金属の名前はいらないはずなんですね。鉄とか銅とか銀とかいう漢語の単語と同時に鉛のような和語がある、それからおもしろいことにカネというような和語がありますね。カネというような和語があって、そしてコガネ、クロガネ、シロガネとかハガネとかですね、そういう複合語の中にものこっていますし、いまカネといったならば千円札とかそういう紙でできたものもカネというわけですけども、そういうようなカネということば、あるいは縄文時代には犬はいましたから、イヌということば、ふるい、人間が生活していく上でその地域である時代からかかわったはずのものをあらわすことば、そういうことばというものは一体どこからきているのか、イヌはどこからきているのか、カネはどこからきて

いるのか、やっぱりひとつひとつ問題にしていかなければならないし、いま現在ではそういうことを解決できる段階ではまだないわけで、これから先の話なんですが、そういう種類のものがあります。

また、たとえば、さっきアルクとかハシルとかいろんな動詞をあげました。しかしヨムとかカクとかいう動詞はあげなかった。それは文字が必要になってからいまのヨムとかカクとかいうことば、それは意味つきでひとまとめにして、ヨムというのは本をよむという意味のヨム、カクというのは字をかくとか絵をかくとかいう意味のカクですが、文字が必要になってからそういうことばが必要になるわけで、字や絵がない間はそういう行動をあらわすことばはないわけなんですね。けれどもそのヨム、カクとかいうことばは、やはり和語であって、たとえばヨムというものはおそらくとなえるというもとの意味をもっていたのでしょう。そのとなえるウタが、あるいはとなえる文句がヨミウタで、喜界島ではユミタとかユムタとかユミュタとか、つまりヨミウタといえば言語のことであるし、ユンタは先島の方に行くと歌謡のひとつの形態をあらわすようになりますが、そういう、ヨムというのはもとちがった意味をもっていた。そうして、かぞえるときには昔の人間はみんなひとおつ、ふたあつとこう、となえましたから、となえるという意味がかぞえるという意味に発展したんだろうとか、あるいはまた、歌をヨムというのは歌を創作するという意味ですけれども、歌をつくったときには、まず皆におお声をだしてきかせる。だから歌をヨムというときには歌をつくるという意味になるんだろうとか、そういうふうに、ひとつの単語がもとの意味から、どうしてほかの意味へ変化していくのか、道

すじをおってみるわけです。そこで、もとの意味は、もしそれがことばをとなえるという意味であるとすれば、もとの意味に変化がおこって、ひとつの単語の意味内容が変化した、あるいは豊富になったということで、そういう手段でもってあたらしい文化に対応していくということが言語の歴史のなかでたくさんおこりますね。カクにしてもおなじ、顔をカクというのは、こういうふうにしてカクとか、腕がかゆいからカクとか、こうするどいものでこうやる動作ですね。これを文字をカクというふうに転用する、もしかく対象が人間の膚だとすればこうやればカクなんですが、紙に字をかくばあいには、「紙をカク」とはいわない。「紙に字をカク」といわなければいけない。そこにはっきりとした文法的な格支配の上でのつかいわけが発生して、そしてあたらしい意味が獲得されて、そしてもとの単語から意味が拡大していく。そういう意味でもですね、基礎語彙というのは言語の発展の基礎なのです。そして中にはそういうものがいろいろに発展しつくして、もとの意味はとりのこされて、痕跡的にのこっているというようなものもいろいろありますね。たとえば空をあらわすアメということばは、アメあるいはアマとなりますが、それはふる雨とおなじものではないかとおもわれますけれども、今日では、空のことはアメとはいわないで、テンとはいっても、アメとはいわなくなった。けれども複合語の中に現在でものこっている。沖縄ではアモーリとか、アマウリ（天女の天くだり）とかいうときのアマが、痕跡としてのこっていますし、現代語の中でも、大蔵省の官僚のあまくだり人事なんていうときにのこっている。そういうとこにポツンとのこっている。複合語の中にのこるというばあい

もあるんですが、慣用句の中にのこるとか、固有名詞の中にのこるとか、うしなわれかけた単語や、うしなわれかけた単語の意味はこうしていろんな形でのこっています。そうして単語の意味が全体として発展する場合にはそういう基本的な単語というものは非常にしばしば語彙体系の発展の基礎としてはたらくのです。

あまりくわしくしゃべっていてもきりがないので、日本語の語彙の歴史をおおまかにながめると、たとえば、日本語の歴史の中で、四、五世紀から八世紀、九世紀くらいにかけて、そこらあたりは中国語の単語をたくさんにとりいれる時期でありますね。この時期は単語をたくさんにとりいれるし、それから同時に漢文もとり入れる、そして文字もとりいれ、かな文字もつくるというふうに、いろんなことがおこった時期で、この時代は、日本語の語彙が非常におおきく変化し発展する時代ですね。それからずうっと時代をくだって明治時代にもおおきな語彙の変化がおこりますね。しかしその変化というものは、いままでにあった漢語を材料にしてつくっていくという、特徴をもっております。で、古代におこったのは、これは外国語をとりいれたんですが、明治時代には外来語もはいりましたけれども、漢語のあたらしいくみあわせをたくさんつくって、たとえば哲学であるとか民法であるとか郵便であるとかいうように、あたらしい概念をつくりだしてゆく。たくさんの科学用語、政治、法律用語というものをそこでつくりだす。このばあいは民族語がその材料となったんですが、ところでよその国の単語がはいってくるばあいに、たとえば漢語というものをひとつのモデルとしてかんがえた場

合に、その漢語を、日本語で名詞でとりいれるならば、日本語の名詞は曲用しませんから、語尾がかわりませんから、うしろに助詞をくっつけてつかえばよろしいわけで、したがってそのままもってくることができるわけですね。ところがその国の単語を動詞としてとりいれるばあいには日本語の動詞は活用するから、そうはいかない。そのばあいには一般的に愛スルとる信ズルとか、あるいは勉強スルとかいうふうに、スルという動詞をくっつけて、外国語を日本語の中にとりこむという、そういうことをおこなうわけです。

形容詞はどうかというと、やっぱり形容詞にも語尾があります。そして日本語の形容詞には、たとえば、タカイとかヒクイとか、イでおわるタイプ、それからカナシイとかウレシイとかシイで終わるタイプ。これをひとまとめにまとめて第一形容詞とかりによんで、今度はもうひとつ立派ナとか元気ナとかですね、シックナとかそういうものを第二形容詞とよぶならば、現代では形容詞はかならず第二形容詞でとりいれられるということがおこなわれるわけですね、アブストラクトナとか、ナウナ服装とかのように。そういうふうに第二形容詞にしてとりいれられる。そして漢語をふくめてたくさんの外来語にスルという動詞と第二形容詞の語尾のナがくっついているという現実がいまの日本語の語彙体系の中にあるとするならば、今度は、それでは、漢語以前に、何か大量の単語をよそからとりいれて、動詞や形容詞をふるい日本語がつくったとするならば、それは何かひとつのタイプになってその中に存在しているはずだということもかんがえてみなければならない。そういうふうにして、先ほ

ど屋比久先生から動詞の活用のお話がありましたけれども、そこで動詞の語幹の末尾にいろんな子音がでてくる。その子音のでてきかたの頻度数は、これをしらべてみるとずいぶんちがうはずで、そしてそういうところにどういう意味の単語がどのくらいはいってくるかなんていうことをしらべることも大切になってくるわけですね。それは、日本語が、歴史以前に何かをとりいれたとするなら、そういうところになんか特徴がのこるはずだからです。そういうところをやっぱりわれわれは気をつけてしらべてみなければならないとおもいます。

あるいはまた、語彙というものはおなじただの名詞でも、ひとつひとついろんなふうに、これは普及しやすい名詞であるか、それとも方言に分裂しやすい名詞であるか、単語ごとに性質があるのですね。たとえばコロンブス以後に新大陸から世界にひろまったいろんな植物があります。とうもろこしがそうだし、じゃがいもがそうだし、ピーナツがそうだし、かぼちゃもそうです。そうしてそのうちのじゃがいもはドイツ人やフランス人の農民を飢えからすくいましたが、われわれのしたしいさつまいもは沖縄や本土の人間を飢えからすくったわけなんですが、ところがそれは方言をみてみると、サツマイモなんて、さつまのいも、ジャガイモはジャカルタのいもですか、カボチャはカンボジアとかですね、まあ変な、その、落花生なんか、ナンキン豆とか、沖縄でジーマーミなんていうのは、地の中の豆というように、いろんなぐあいにあらたに単語をつくっているんですが、さっきあげたタバコという例は、これは方言辞典をみてもそんなに方言がないんですね。ところが、かぼちゃやさつまい

もやとうもろこしや、そういうものにはたくさん方言があるのです。沖縄だけをみても、さつまいもの方言はいくつもあります。本土をみてもサツマイモという所と琉球イモという所と、カライモという所とありますし、じゃがいもにもいろいろある。かぼちゃもボーブラといったり、ナンキンといったりですね、ぼくは東京でちいさいころはトーナスといっていました。それは中国のなすびという意味なんでしょうね。なぜそうなのか。たばこにはなぜ方言がすくないのか。それはたばこというものがかるくて高級な嗜好品であって、商品であったからという性質をもっているからだとみなければなりません。たとえば中国に産したお茶というものは、日本語でも方言がないとおもいますが、英語のティーとか、ロシア語はチャイとか、中国語が世界中にひろがっていったんですが、これも世界を股にかけた商品であって、当時運搬できるようなものであったからなのです。しかし、カンボジアでかぼちゃをつくって東京にうりにくることは、これはできないんですね。あるいは九州でつくったかぼちゃを江戸にもっていってうるわけにもいかなかった。かぼちゃとかそういうものはごくかぎられた範囲の中での商品にしかなりえない。

ですからたまたま国語研究所が言語地図というものをつくったとき、そんなようなことは全然かんがえずに、もっとも、あの地図の項目えらびは非常に素朴な、たぶん方言がおおいと分布図もおもしろいだろうぐらいのところでつくったものがほとんどなんですが、その中に日本語にとってあたらしい新大陸原産のもののなまえがいくつもはいっている結果になりました。米というものにも、米つぶそ

のものをあらわす米という言葉には方言がすくないですね。これも日本でむかしからの主要なみつぎ物であり、そうしてまったくもう、一番大切な商品で、全国的な商品であったということとを別にしてはかんがえられないことでしょう。そういうふうにして、文化というものとそれをあらわす単語というもの、そして歴史というものを、非常にこまかく、われわれ方言学者というものは歴史学者や考古学者や民俗学者にまなびながら、この単語というものはどういうものであるか、たとえばネコは平安時代以降の家畜であるとか、それから、これは商品であるかどうかとか、そういうことをしりながら、調査した方がやっぱりいろんな点でひとつのみとおしをもちやすいんじゃないか、言語学者の独断的な語源論をさける意味でもそういうことはいえるんじゃないかと、そんなふうにかんがえます。

今日、日本では言語地理学というものが比較的さかんになってきましたけれども、さっきもいいましたように、そこにはまだたいした、そういう語彙に関する一般的な理論があって選択された項目についての地図はすくないので、そして調べた項目数もすくないので、そこからえられる結論というものはまだちいさいんですが、われわれが言語学とそういう周辺諸科学についてつよくなって、そしていい項目をえらんで、沖縄の、奄美から与那国までと、そうしてもちろん本土もしらべなければなりません。そういうものをしらべるならば、ことばと人々の文化とのいろんなかかわりというものが一層あきらかになりやすいんじゃないかと、そんなふうにおもいます。

そして、さっきもいいましたように、基礎語彙のようなものが語彙を発展させる原動力としてはた

らく。基礎語彙は、たとえばクチという単語をかんがえただけでもですね、「口にする」といえばしゃべることだし、「口をだすな」というのは干渉するなということだとか、「土瓶の口」とかですね、いろんなふうに意味変化して、意味や用法が豊富であります。カケルというのは、「水をカケル」とか、あるいは「洋服を壁にカケル」とかいう、そういう動作をあらわすわけですけれども、「心をカケル」とか「電話をカケル」とかですね、もうとんでもないいろんなところに用法を発展させています。それは基礎語彙の特徴であるし、基礎語彙というものは文化の発展に応じて用法をひろげ多様にしていくという、そういう特徴をもっているといえます。

そういう内的な材料から言語がずうっと豊富になってくるか、それとも外的なものをとりいれるか、そうして外的なものをとりいれて内的なものも発展するんですが、両方のことがおこったばあいに、たとえば一方は雅語になって一方は俗語になるとか、一方のニュアンスがちょっとずれるとか、いろんなことがおこってくるわけですね。そのふたつのかねあいというものがどういうふうに、たとえば琉球方言のながい発展の歴史の中でやられているか、こういうことの研究というのは、まだまだこれからゆっくりと方法論をみがいてきちんとやっていくべきことだとおもうわけなんです。

そうして、まあ、ここでは語彙の話ばかりをしましたけれども、最後に、こうしたことをかんがえにいれながら、そして先だって服部先生が比較と内的再構ということばをおつかいになりましたが、

先生がしめされたような非常に厳密な手つづきをへながら、ゆっくりやれば、これは琉球方言というものは本土方言ともちかいし、また方言学のたいへんにゆたかな宝庫であるわけですから、そこからいろんな歴史をほりおこすことができるし、それから言語の発展の、そしてそれの社会の発展とのかかわりについての一般的な法則のひとつの実現を、みごとな実現というものをその中からみてとることもできるとおもうわけです。ただ、沖縄にはわたしたち方言学者は、仲宗根先生や服部先生などのいろいろな業績や指導力によりましてたくさんいるわけですけれども、しかし同時に周辺の言語を研究する研究者もいなければいろんなことがやっぱりまだわかってこないので、これからは、たとえば台湾の高砂語であるとか、あるいは揚子江の南の方に昔いたであろういろんな民族の言語であるとか、朝鮮半島の言語であるとか、中国語であるとか、アイヌ語であるとか、そういう言語の研究者というものがやっぱりでてきて、そうして全体としての研究がなりたたないかぎり、最終的なものというのはでてこないわけです。ですから、これからの研究者というのは、もう年をとったわたしたちの世代はそういったところにまでおそらく手がのびないでしんでしまうでしょうから、そういうところまでふくめたおおきな関心をもちながら、やっていかなければいけないんじゃないかとおもいます。

そしてさしあたって、この十年間くらいで琉球方言の、歴史方言学的な価値を有する部分というものはみごとにほろびてしまうんではないかと、言語の発展の法則からみればほろびると、そういうふうにみえます。だとするならば、あと十年あるかないかという間にわたしたちは何をすべきかという

ことがおおきな問題としてのこるわけですけども、これについてはこのあいだ服部先生がおっしゃいました。そうして私はもう、どうも、自分がかんがえていることとすっかりおなじ必要性を先生が強調されましたので、ここでまたくりかえす必要がないのかあるのか、やっぱり二度いった方がいいとすれば、二度おなじことをいいましょう。

やっぱりひとつは、琉球列島の島じまのうちのいくつかの代表的な方言というものを完全に、exhaustive に全部あらいざらい記述することでしょう。全部、字びきというものをつくるならば語彙の全部をやっぱりやらなければいけない。それはさっきの基礎語彙がどういうふうに発展するのかということをしるためにも、そういういろんなさまざまなものがそこに全部はいっている必要があります。ま、つまらない、こんなちっちゃなものを方言でこういうとか、そういうのをひとつひとつみるとつまらないようなことでありますけれども、全体をくみあわせてみれば、そういうものは非常におもしろい材料になりうるんですね。

そうして同時に、語彙をあつめるばあいは用例をとらなければいけない。なぜ用例をとらなければいけないかというと、ひとつの多義語というものが、意味がたくさんある単語がそのうちのひとつの意味を実現するのはコンテクストの中においてなんですね。こういうコンテクストだからこういう意味がおきるんだなと、そしてこういうコンテクストの中でつかわれるとその次にこういうふうに意味がずれるんだなと、そういったようなことが用例からわかってくることがたくさんあるのですね。た

とえば、これは方言ではいまちょうどいい例がおもいうかびませんので、ひとつ標準語の例をかんがえてみますと、たとえばキクという動詞がありますが、このキクという動詞はまず、ただ「音をキク」とか「声をキク」とか、聴覚活動をおこなうという意味があります。そしてそれは意識的でも無意識的でもかまいません。無意識なばあいにはキコエルともいいますが、「あすこで変な音をキイタ」というばあいには別にきこうとしてきいたわけではない。そういうきくという意味と、もうひとつ、キクという動詞にはたずねるとか、質問するという意味がありますね。質問するばあいには、今度は質問ですから当然相手が必要なわけで、相手は「だれだれに」という形でいいあらわす。そしてコンテキストを完全にするためには「だれだれになにをキク」とならなければいけないんですね。あるいは「だれだれになにについてキク」とか、あるいは「だれだれになにがどうであるかキク」とかいうわけですね。「だれだれに」というものがかならずくると。そしてたとえば「あの人に道をキク」とはいえます。この「道」というのは具体的な名詞ですけど、これはじつは道順という意味で全体が慣用句なんです。「あの人にコップをキク」といえますか。いえないんです。ふつうそこには具体名詞がくることができないんですね。「コップについてキク」とか、「コップのことをキク」ならこれはいえる。「コップであるかどうかキク」、これもいえる。ところが一方、ただ聴覚活動をおこなうという意味のキクという方は、「声をキク」、「音をキク」「音楽をキク」のように音をあらわす名詞ならばそこに自由にくることができる。そして「だれだれに」というのはこないんですね。こう

してふたつの意味のキクという動詞ははっきりちがったコンテクストの中にあらわれるんです。ひとつの単語が意味を実現するためには、厳重な条件がある。そういう条件というものをひろいだすためには用例なしにはできません。そうしてそういうことはなかなかむずかしいから、だから自然会話なんていうものとか、民話とか、そういうものを録音してテキストにしてとっておくのも、そういうものをひろう意味で大変あとから役にたつ。方法論というものはあとから進歩しますから、いまからやっぱりこれは無駄かもしれないとおもうものも絶対にあつめておく必要があります。

そして、そういう字びきづくりというものはどうしても必要ですが、もう一方ではやっぱり言語地理学的な調査というものが必要です。ひとつひとつの地点をこまかくしらべるというばあいは、これはひとつの字びきをつくるときのようにそんなにたくさんの単語についてしらべることはできません。けれども地理学的調査をやってみると、部落ごとのちがいというものが、変化の、何というか、足あとをきちんとしめしてくれる。ある一箇所だけしらべたのではわからないことが、隣部落、隣部落としらべていけばわかってくる。これは非常にたくさんわたしたちが経験することです。で、そういう調査にどういう単語をえらんでやったらいいか、これはこれからおこなわなければならないことですけど、調査する項目のえらびかたというのもなかなかむつかしくて、ゆっくりと方法論をみがいてえらばなければならない。

そうしてまた、同時に、はなしことば方言ではない、歌謡語、あるいは、私は歌謡共通語なんてい

うことばをつかったことがありますけれども、そういうものの資料の中には非常にふるいものがでてくる。それははなしことばではないということによって、おぼえられ伝承されますから、当然ふるいものがのこる。そういうものも、もちろんいろいろな人びとの努力で非常によく現在あつめられつつありますが、将来大変役にたってくるだろうとおもいます。

大体以上のようなことです。なんかひとつのちいさな目的のためにちょこちょこと調査してちいさな個人的な論文をつくるというのではなくて、総ざらえにやるということが、今後十年間のわれわれのしなければならない仕事だと、そういうふうにおもいます。で、まあそんなことをかんがえて、こちらにきてからいろんな人びととはなしあったりして、沖縄言語研究センターなんていう、名前だけおおげさな組織をつくりました。それは歴史方言学のためだけではなくて、今日の沖縄の、たとえば高等学校の子どもが教科書の一ページの中によめない漢字が十も二十もあって授業そのものがなりたたない、そういう沖縄の目のまえの現実の問題というものを解決するためとか、いろんなたくさんの目的のためにつくったんですが、やっぱり、そういう仕事は協力してみんなでやらなければ、もうとてもひとりでできるような仕事ではない。しかし協力してやってゆけば非常にゆたかなものをうみだすことができるでしょう。これは沖縄学とか、そういうものだけに貢献するものではない。もっと非常にひろいものをめざしているのですね。われわれは琉球列島の島々の方言という大変にゆたかな材料をもっているし、そしてこれを研究するための力もつけていかなければならない。そしてそうする

ことが、やっぱり、何というか、沖縄文化なんていうと大げさですけども、現代の沖縄というところは衰退にむかっているのか、それともこれから隆盛にむかうのか、これは非常にむずかしい問題ですが、沖縄という地域とその文化がどういうふうにむかうのか、またむかわせなければならないのか、はっきりさせてくれるだろうとおもうのです。こういう歴史の研究、科学の研究というものは、間接的ではあってもかならず人びとに貢献できると信じて、みんなで力をあわせてやりましょうということで、話をおわらせていただきます。

〔追記〕 那覇での沖縄文化研究所の講座の講師はおひきうけしたものの、これを論文の形にかきあらためることは、ほかの仕事との関係から時間がもてず、はたせなかった。やむをえず、今回は録音にとったはなしことばのままを、いいまちがいをなおす程度に手をいれただけで、ひとの力をおかりして文字にすることになった。よみにくさと不備は読者におわびするしかない。

なお、この講座のなかでその必要についておはなししした琉球方言の大規模な研究を、さいわいに沖縄言語研究センターのおおぜいの会員が力をあわせて、ことしの夏から十年計画で、おこなうことになった。いま、その中心的なメンバーが準備におわれている。このことを読者につけくわえてご報告できることをよろこんでいる。

（一九七九年五月）